

2では下顎孔の破壊と同部位からの腫瘍の突出が見られた。このような所見を得た時には転移性腫瘍も疑い、全身的な検索が必要であると思われる。

4) 結核性頸部リンパ節炎の1例

高瀬 裕志・外山三智雄
平山 昭平・江口 徹 (日本歯科大学新潟)
前多 一雄 (歯学部放射線科)
海野 仁・山口 晃
西村 恒一 (同 口腔外科第一)

結核性頸部リンパ節炎は悪性腫瘍との鑑別が困難な場合があり診断には注意を要する疾患である。最近我々は、46歳女性の左側耳下部に発生した本症を経験したので、その概要を報告すると共に各種放射線学的検査結果を供覧した。主訴は左側耳下部の無痛性腫瘍で、既往歴、家族歴に特記事項はなかった。現病歴では、平成元年6月より同部に腫瘍を自覚したため某歯科にて抗生剤投与をうけた。しかし、改善がないため本学口腔外科第一講座を紹介され来院した。現症として、左側耳下部に30×20mmの境界明瞭、弾性やや硬、可動性の腫瘍を触知した。臨床検査所見では、赤沈の促進があり、また、ツベルクリン反応は陽性だった。放射線学的検査所見では、造影CT像でrim enhancementを呈したことが、また、⁶⁷Gaシンチグラムで腫瘍に一致した部位に集積亢進が認められたことから、悪性病変との鑑別に苦慮した症例であった。

5) 胃・十二指腸動脈瘤の1例

貞船 善朗・尾崎 俊彦 (済生会新潟総合)
本間 明 (病院内科)
相場 哲朗・川口 正樹 (同 外科)

胃十二指腸動脈の動脈瘤は、臓器動脈瘤の中で最も頻度が低いとされているが、我々はその1例を経験したので報告する。症例は83歳女性。30歳時に子宮外妊娠の既往あり、平成元年6月、食欲不振を主訴とし来院。受診時、腹部エコーにて6×5cmのmixed patternを呈する腫瘍性病変を認め、精査入院となった。腹部単純では上腹部に径8×5cmの類円形の石灰化陰影を認めた。ドップラーエコーでは、嚢胞状の部位に動脈性の血流を認めた。腹部造影CTでは低濃度域内が類円形濃染像として描出され、一部に壁在血栓の存在が示唆された。最終的に腹腔動脈造影にて、胃十二指腸動脈瘤と診断された。文献的には、胃十二指腸動脈瘤は、術後、膣炎や

TAE後に発見されることが多いが、本症例では原因不明であった。

6) 腹部CTにおけるバリウム造影剤の使用経験

樋口 健史 (新潟大学放射線科)
林 浩子・山岸 広明 (新潟県立中央病院放射線科)

今回、我々は腹部CT用Barium製剤を使用する経験があり、比較的良好な結果が得られたのでこれを報告した。CT検査で腹部、骨盤腔あるいは両方をスキャン範囲とする症例のなかから10例を無作為に選び対象とし、硫酸バリウム4.77%/v%製剤を3倍希釈し、750mlを3回に分けて経口投与した後にCTを撮影した。その結果、多くの症例で十二指腸とその周辺臓器との識別は容易になり、上腹部の診断に際しては有用な場合が多いと考えられた。しかし、今回の投与量では骨盤腔内の小腸を十分充満出来なかった。硫酸バリウムの濃度は1.59%で十分な造影効果があると思われた。この硫酸バリウム製剤は比較的飲みやすく、明らかな副作用は認められなかった。

7) 両側副腎に初発した悪性リンパ腫の2例

清野 泰之 (新潟大学放射線科)
川崎 俊彦・佐藤 玲子 (長岡赤十字病院放射線科)
秋田 真一
林 浩子・山岸 広明 (新潟県立中央病院放射線科)

Non-Hodgkin's Lymphoma (NHL)においてリンパ節外浸潤をしめすものはまれではないが、副腎が初発と考えられる場合は少ない。3例の副腎初発と考えられるNHLを紹介するとともに、あわせて文献上の考察を加えた。NHLのretrospective CT studyでは、1~4%に副腎の浸潤がみられると報告されている。また、組織ではdiffuse histiocyticが多くみられた。画像診断上両側ないしは片側性のびまん性副腎腫大としてとらえられ、通常は内部性状は均一である。また、ほとんどの例で、隣接臓器の浸潤や後腹膜リンパ節の腫大を伴っている。この点からCTは診断上最も有力な手段と考えられる。これらの付随所見を欠くとき鑑別診断が困難な場合がある。